

小学校④

子どもたち一人一人の「わかる」「できる」「やりたい」を大切にした授業づくり
～子どものやる気を高める工夫を取り入れながら～

1 テーマ設定の理由

本校の知的障害学級には現在 3 名の児童が在籍している。特別支援学級では、学年、学習能力、特性などが異なる様々な児童が学習しており、多様化した教育的ニーズに合わせた授業づくりをしていかななくてはならない。児童たち一人一人と向き合い、その思いを大切にした授業をどのようにつくったらよいか日々頭を悩ましている。また、児童が「わかる」「できる」ための授業づくりについて研究することは、私が最も力を入れて取り組みたいことである。

児童一人一人が「わかる」「できる」ことを感じる授業を積み重ねることができれば、児童は次第に自信を高め、意欲的に学習に取り組むことができるようになると思う。また、教材を工夫することで児童のやる気を高められることをこれまでの実践で学んできた。児童たちの「やりたい」という気持ちを大切にした授業づくりについて研究を進めていく。

2 実践内容

① 学校にあるいろいろなかたちを見つけよう

一年生算数の「かたちさがし」の取り組みである。ブロックや空き箱を使って、似た形探し（立方体、直方体、円柱、球）をおこなった後に、学校内にある似た形探しを行った。ペアに一台ずつタブレットを渡し、カメラ機能を使って見つけた形を撮影させた。児童たちは楽しそうにいろいろな形を探し、一時間の授業で何十枚も写真を撮っていた。「かたちさがし」を終えた後は、それぞれのペアが撮った写真を見ながら、どんな形を見つけたか振り返りを行った。タブレットを使ったことで発表者は写真を簡単に相手に見せることができるので発表しやすく、また聞き手も写真を見ながら話を聞くことができてわかりやすそうだった。児童たちは一つの机に顔を近づけながら真剣な表情で発表し合い満足そうだった。「かたちさがし」は、児童たちにはとても楽しい活動だったようで、単元が終わった後も「かたちさがしをまたやりたい。」という児童もいた。



② 身近にある「かさ」から量感を養う

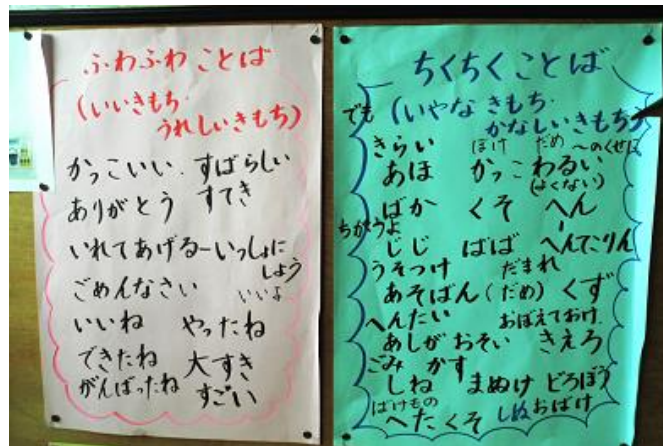
2年生算数「かさ」の取り組みである。ここではかさの単位（mL、dL、L）がたくさん出てくるが、なかなか理解するのが難しい。そこで図書を活用し、生活の中で使われている「かさ」を取り上げて教えることにした。まず、実際に実物も用意をし、水を入れて量の感覚を学ばせた。次に図書の中には「牛乳パック（1リットル）は栄養ドリンク（1デシリットル）の10個分」などの紹介があったので、具体物を使って確かめた。児童たちは水がこぼれないよう慎重に水に移し変えながら真剣に取り組んでいた。また図書の写真を教室に掲示し、繰り返し指導を続けてきたので、量の感覚が身についてきている。



③ ふわふわ言葉・ふわふわ行動を集めよう

児童の生活環境を整える実践である。自己コントロール力の弱い ADHD を含む発達障害のある児童は挑発されると言い返してしまう。そして、どんどんエスカレートし、自分で気持ちを収めることが難しくなっていく。「ちくちく言葉」を言い始めると、感情が高まり途中で止めることができないばかりか、けんかや暴力に発展することもある。

そこで、ちくちく言葉を言われるとどんな気持ちになるか確認し、これからは減らしていくことを児童たちと約束した。逆に、ふわふわ言葉を言われると良い気持ちになることを確認して、「ふわふわ言葉を一日三回」言うことを目標に取り組みを続けている。言った回数は黒板の名前シールの下にカウントしていき、またどんな言葉がふわふわ言葉・ちくちく言葉なのかわかるように表を掲示している。



ふわふわ言葉の取り組みは、始めてすぐに効果が表れた。一人がふわふわ言葉をいうと、それにつられて周りからふわふわ言葉が出てくる。次から次にふわふわ言葉が増えていき、学級全体が優しい雰囲気になった。ふわふわ言葉の増加に伴い、ちくちく言葉はどんどん減少している。また、言葉だけでなく、人が喜ぶ行動を「ふわふわ行動」とし、たくさん集めようと呼びかけている。

「ふわふわ言葉・ふわふわ行動」の取り組みをやってみて大事だと感じたことは、児童の良い言動を見逃さず、何が良かったかを学級に返すことで児童たちは良い言動を理解し、次から使おうという気持ちになるのだということである。

また、帰りの会で目標が達成できた人数を数え、その人数分のビー玉貯金をしている。容器にビー玉をためていき、ふたが閉まらなくなったら学級でお楽しみ会を開く約束になっている。ビー玉貯金をすることで、頑張っていて続けようというモチベーションの継続につながり、また自分だけでなく友達に対する励ましや賞賛の声なども出てくるようになっている。



④ 絵カードを使って、指示の言葉を減らし、児童にわかりやすく伝える。

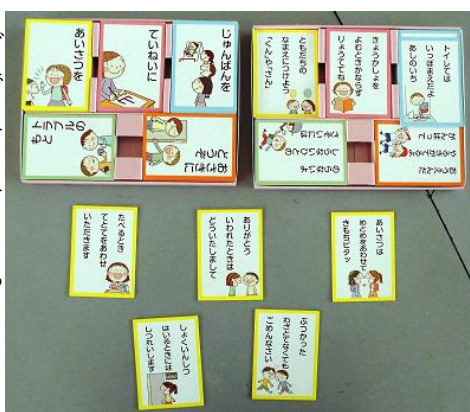
児童の中には騒がしい場所では集中して学習に取り組めない子、言葉よりも絵のほうが理解しやすい子がいる。そのような児童への支援として私は絵カードを活用している。

以前授業中の私語や立ち歩き、身支度などのことで、教師がいくら注意しても改善されないことがあった。クラスが落ち着かなくなると、教師も大声で注意することが増え教室がさらに騒がしくなって・・・という悪循環に陥ってしまう。しかし、児童の立場になったときに毎日のように教師から注意をされる環境では、安心して学ぶことができないと考え、私は「教師の授業中の言葉を減らす」、「非言語を使って児童に伝える」ことを心掛けている。



また、友達とのかかわり方などのソーシャルスキルを学ぶ場面でも絵カードを使って教えるようにしている。

私は低学年の児童を受け持っているので、「ソーシャルスキルかるた」などを使い、遊びながら学ぶことを大事にしている。



⑤ 生活単元学習「さくら学級物語をつくろう」

児童の実態や児童の興味関心から生活単元学習で、自分の好きなことやもの、得意なこと、学校行事でがんばったことを紹介し合い、自分の良さや友だちの良さを認め合う単元を構成した。紹介の方法としてストップモーションを使った。児童たちは普段からタブレットのカメラ機能を使った学習を多く行っている。カメラを用いた視覚的な支援は学習意欲を高めるだけでなく、理解を深めることにもとても有効であった。また、児童たちは伝える場面においても写真や図を用いることによって自分の考えが伝わりやすいことをこれまでの学習で経験している。

児童の実態として3人とも人との関わり方に課題がある。しかし、3人とも学年が違うので、普段の授業ではあまり関わりがなかった。児童たちにみんなで意見交換してやり方を決めながら、協力して1つの作品を作るという経験をさせたいと思い、単元を構成した。

また子どもたちはアニメーション（ストップモーション）の作り方に大変興味をもっていった。アニメーションがたくさん絵を重ねて動いているように見えることを使い、写真を重ねて、現実ではあり得ない動画を作成した。子どものやりたいという思いを大切にすることで、主体的に取り組む姿が期待できると考えた。

一次：これまでの学習や経験した学校行事の写真や映像を見て、これまでどんなことをやってきたか思い出し、自分が得意なこと、できるようになったことを振り返った。得意なこと、できるようになったことは一人で発想するのが難しいと予想されたので、一人で考えた後、みんなで友だちの良さを考える活動を行った。また、児童の日記や日頃の学習、生活の様子などからできるようになったことを教師が把握し、表にまとめ教室に掲示した。

二次：子どもたち一人一人の得意なことや好きなことを紹介するストップモーション作品を作成した。ストップモーションの面白さは、現実ではありえないことができるところにある。まず、子どもたちにストップモーションの見せ方の工夫例を動画と図で示し、いろいろな動きを撮影して楽しんだ。その後、自分の紹介したいことを決め、面白く見せるための工夫をみんなで考えて撮影をした。

子どもたちは活発に意見交換し、様々な面白いアイデアが出てきた。二重跳びを紹介した子は、演技の後、宙を浮きながら退場する作品を作った。鉄棒が得意な子は、いろいろな場所

にワープし、得意な技を披露するという作品を作った。折り紙が得意な子は、できあがった折り鶴が増えたり、宙に浮いたりする作品を作った。このように子どもたちのやりたい気持ちを大切にしたい授業だったので、子どもたちは生き生きと活動し、主体的に取り組む姿がたくさん見られた。また、撮影の際のいろいろな役割を子どもたちは上手に分担して、協力しあう姿がたくさん見られた。

三次：学校行事を劇化し、全員が出演する1つのストップモーション作品を作成した。紹介する行事は、マラソン大会に決まった。話し合いではどんな劇にするか、どんな工夫をいれるか、活発な意見交換が行われた。この活動も子どもたちにとってやりたい活動であったので、子どもたちは生活単元学習を毎回楽しみにしていた。作品が完成した時は、みんな満足そうな顔で作品を何度も見返していた。

四次：完成した作品を交流学級の児童に見てもらった。子どもたちは作品のできに自信があったようで、この発表会を楽しみにしていた。発表会での周りの子たちの反応、発表後の大きな拍手を受けて、みんな満面の笑みを浮かべていた。この単元を通して子どもたちは人と関わることの楽しさや協力することの大切さに気付くことができたように思う。また自分の思いを話したり、友だちの話を聞いたりすることをたくさん練習することができた。



← (見せ方の工夫図)

3 まとめ

「わかる」「できる」授業を実践することによって、子どもたちは学習に意欲的に取り組み、学ぶことを楽しむ姿が見られるようになった。誰でも「わかる」と嬉しいし、「できる」と楽しいのであると感じた。児童一人一人の特性や発達段階に合わせた授業を組み立てることは重要なことである。特別支援学級や通常学級に関係なく、その子にあった支援・指導というのをこれからも考えていきたいと思う。

また「わかる」「できる」ことは、子どもたちが自信をもって学校生活に送ることにつながるのだと感じた。できないことがあるとすべてのモチベーションが低下してしまう子どももいる。私はなるべく子どもに失敗経験をさせない、子どものつまずきをあらかじめ予想し、どの子もスムーズに授業に参加できる手立てのある授業をこれからも考えていきたい。

実践を通して、子どもの「やりたい」気持ちを大切にしたい授業は、子どもたちに活動を主体的に取り組ませるのに大変有効であることが分かった。生活単元学習で行った「さくら学級物語をつくろう」では、子どもたちは学習を楽しみにしていて、やることを伝えると「やったー！」と歓声が上がっていた。話し合いの場面でも、友だちと協力し合う場面でも笑顔で、目を輝かせて活動している姿が多く見られた。これからも子どもたちの「やりたい」気持ちを大切にしたい授業作りに努めていきたい。

そして、学ぶ環境を整えることも大切であることを学んだ。4月当初、子どもたちは様々な変化に対応できず落ち着かない様子が見られた。「ふわふわ言葉・ふわふわ行動」の取り組みを通して子どもたちの言動が変わり、落ち着きが見られるようになった。また、絵カードを使って教師の言葉を減らすことで教室が静かになり、子どもが集中して学習に取り組めるようになった。学ぶ環境を整えることも授業改善につながると思うので、今後も学習の環境整備を大切にしていきたいと思う。

【引用・参考文献】

- ・発達障害の子どもとあったかクラスづくり（松久 真実）
- ・単位がわかるグラムの本（ポルム出版）
- ・ソーシャルスキルカルタ（TOSS ソーシャルスキル研究所）